

演題4. 術中神経モニタリング専用装置MEE-1216
の使用経験

○新井好美 関明子 宇賀神恵美 福山光和 松本繁
子 大塚喜人(亀田総合病院 臨床検査部)
久保田基夫 譲原雅人(同 脊髄脊柱外科)
真々田賢司(千葉大学医学部付属病院 検査部)

【目的】脳神経外科、心臓血管外科、整形外科領域の手術では、各種神経モニタリングが臨床応用されている。今回、われわれは、日本光電のMEE-1216を使用する機会を得、複数の神経モニタリングを同時に行いその有用性を確認したので報告する。

【対象及び方法】脊髄動静脈瘻の手術患者を対象とし、運動神経誘発電位(MEP)と左右の下肢体性感覚誘発電位(SEP)の3種類同時モニタリングを行った。MEPは、頭皮上の運動野をコークスクリュー(CS)電極で電気刺激(600Vの5連発トレイン刺激)し、左右上肢の母指球筋と左右の足底筋の筋電図を針電極にて記録した。SEPは左右の後脛骨神経を脳波用皿電極で刺激し頭皮上の下肢感覚野からの電位を針電極により10分間のトレンドで記録した。

【結果】機器の操作性は、初めのパラメータ設定がやや複雑であるものの、全体的には良好であった。今回のモニタリングは、アースの接続部位により別の項目測定に影響を与えることが確認されたため、複数項目同時測定ではなく1項目測定終了後に次の項目測定を行った。

【考察】本装置は、1台で多項目の同時測定が可能であり、さらにノイズキャンセラー機構等により、手術操作に伴うアーチファクトを高頻度にキャンセルすることができるため、継続的に良好な波形が得られた。したがって術中モニタリングに適した装置であると思われる。しかし、複数の項目を同時記録する場合は、多項目の電極間での干渉を認めることがあるため、電極装着位置に注意し、影響がないことを確認した上で測定する必要があると考えられた。

(連絡先:04-7092-2211 内線5354)